第1回 三越伊勢丹・千住博日本画大賞 決定

大賞に全民玉氏

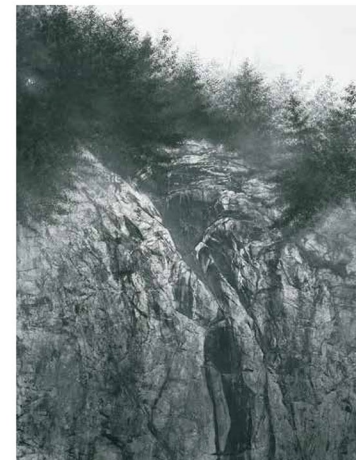
今一度「日本画とは何か？」を問う

入選・入賞は20作品 厳選

未来に向けた日本画の在り方を問い直す公募展「第1回三越伊勢丹・千住博大賞展」が8月26日㈬開幕し、8月31日㈪までの会期で、日本橋三越本店本館6階美術特選画廊において開催された。規定枠50号大とした今回の応募総数は全国から200点を超え、倍率10倍の中から選出された入選作は20作品のみ。稀にみる激戦コンクールとなった。厳正な審査の結果、入選20が決まり、大賞など受賞3作品は開幕初日会場で発表された。

展覧会は各入選作家による未発表新作50号と10号小品、さらに審査にあたった千住氏の贅沢出品60号新作《断崖図》が展示された。

新たな公募コンペに審査員として迎えられた千住博氏に大賞展の意義、未来に向けた日本画の在り方、新型コロナ禍の時代を芸術家はどうあるべきか、一問一答でお聞きした。



千住博《断崖図》2020年 130.3×97.0cm
雲肌麻紙、プラチナ泥（三千本膠）、天然岩絵具（ラスコーマットメディウム、三千本膠）

―改めて日本橋三越本店美術部とタッグを組まれ、実現した「大賞展」の意義をお聞かせください。

千住博（以下、千住） 戦前の横山大観、戦後は東山魁夷先生ら近代、現代の美術史に残る日本画界の巨匠の先生方は通して高い評価とともに、また異論を唱えられてきた厳しい審査基準もお持ちです。日本画の定義のあいまいさによるものでもありますし、しかし、むしろそのことが後になって多彩な日本絵画の発展の土壌となってきました。その主な活躍の舞台であった三越本店美術画廊が、これから共に歩んでくる日本画と出会いたいと企画されたのが「大賞展」でした。

―200点超の応募作品から20点に絞る審査を経られての感想をお聞かせください。

千住 たった20作が入選しないのですが、素晴らしい作品が多数揃いました。1週間に及んだ審査は緻密で厳しい、どれが入ってもそれなりの理由があるという所まで審査は難航しました。最終お客様に最高の作品を提供してきた、経験豊かな三越美術部やバイヤーの目も厳しく、それぞれの見方や意見もあって最後の入選は終わる寸前に最後の数作を入れ替えたほどです。

作品にまず絵にしにくくなるような感動があって如何にそれを表現に伝えようとしているか、小手先でなく作者の人生の確かさがそこにあるのかが問われました。

―応募入選者を拝見しても幅広く、出身大学や公募団体なども多岐にわたっています。

千住 もちろん日本文化の源流は中国、韓半島を経て伝播してきました。大戦の前後は欧米の美術にさまざまな影響を受けました。日本美術の根幹は多様性や国際性です。日本の中には世界の文化が底流にあるのです。今回、「あなたにとって日本画とは何か？」の問いかけを出しています。出品者はそれぞれの答えをここに出されています。

―大賞展を全く予期せぬ新型コロナのパンデミック（世界的大流行）と重なりました。

千住 貴紙の特集連載「美術の今―我々はコロナ禍から何を得るのか」を興味深く拝読しました。その中で現代の巨匠の生活のアンケートの文章には納得し教えられました。先生方よりしっかりと制作の日々を過ごされておられました。考えてみますと疫病大流行後のルネッサンス期や第2次世界大戦の頃でも画家たち芸術家は安堵感を打破しようとする中で傑作を遺しました。こんな騒然とした中、落ち着いて制作できないというはそれまでです。逆境のなか自分の生きる証し、痕跡を刻みたいと思う芸術家たちによって美術史は築かれてきました。今、それが私たちの番なのです。

―入賞作・受賞作について。

千住 入選の20作品は緊張感があり誠実に正直に描いているのが伺えます。入賞展選は最終的には世界観の強度の差だと思います。花や青色、黒色それぞれの方向性の中で入賞作が一堂にそろいました。それをどちらが良いか比べることはできませんし、ですから受賞作はいかに切り口の独創性を入々に示すかが、そしてこれら可能性がある、と具体的に多くの人々に影響を与えることができるかが問われました。すばらしい作品が出品してくださった皆さんに心より感謝します。

―贅沢出品の新作《断崖図》、日本画の素材についても一言お願いします。

千住 これは語り出すと大きなテーマになるのですが、画家も道具を通して考えます。そして和紙は日本文化そのものなのです。だから今一度、もう紙を通して和紙にしっかり向き合うと思ったのです。紙をもんで、山あり谷ありの起伏を画面に創り出し、絵の具を流すと、影絵や立体造形というジャンルとの境界も越えていくのではないかと感じます。日本画の越境的可能性を確信しました。道具としての和紙や岩絵の具、筆や刷毛が日本画の可能性を気付かせてくれると思います。それが今も昔も画家たちの実感なのではないでしょうか。

―カタログ掲載メッセージ―

「世界表現としての20の提言」

千住 博

応募してきた作品に対し、私はそれが日本画か、日本画ではないかを問うことはしなかった。

ただ長年の経験や過ぎ、それが芸術であるかどうかの一点のみで、判断を重ねた。すなわち、一本の作品が生きる作者の寄与大の身体性を備えているか？

伝えたい新鮮なリアリティ、感動はあるか？ということだ。

それに加え、コロナによる新しい時代に生まれる新潮流であってほしいと考えた。

私達は今時代の分水嶺を生きている。必要なのは、境界線を飛び越え、新しい地平に踏み出す自覚だ。

世の中には、デジタル、オンライン化で今までとは違った社会が出現しつつある。

今のデジタルは、人間の五感に対応していない。デジタルは大切なツールだ。しかし、デジタルだけでは人は生きていけない。

デジタルでは表せないことを補完する形で、芸術とは、本来、時代の欠如を指摘し、欠落した人間らしさを取り戻す社会的意識により成立している。

だから今後、生きている痕跡や素材に対する敬意、アルゴリズムで表せない意外性が大切なっていくと私は思っている。

言う迄もなく、作者の出自も授法も関係ない。日本美術でこれが問われたことは一度たりとてない。

シルクロードから渡ってきた大陸文化が日本文化の形成に多大な影響を及ぼし、そして戦後はアメリカ美術によって日本の美術は大きな地殻変動が変化が今に至っている。

そもそも日本文化は多様性、国際性によって成立している。

日本の中に世界はあり、世界の中に、日本文化の源流はある。

そして元来美術には、「私選」が生きているのです。

世界とはどのような世界か、という問いかけ。

「私」ではない。「私選」という複数人数だ。

「自己表現」ではない。「自己表現」でもない。

自己表現は エゴの世界に行き着く。エゴは芸術の対極だ。

等伯も北斎もモネもゴッホも、ウォーホルもボルタンスキーも、私選はこのような世界に生きている。どうかどうかという「世界表現」でありたい。

そのような方々を念頭に置き、いつまでも素晴らしい作品でありつづけたい。

ここに寄せた20の提言が、私は、等しく高くリスペクトを払っている。

1980年 東京都生まれ
2008年 東京藝術大学大学院 美術研究科絵画専攻 修士課程修了
2019年 第2回枕崎国際芸術賞展 大賞

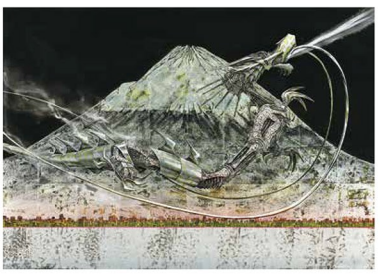
大賞（千住博賞） 全 民玉《不確かな世界―落ちた星―》

【作品評】
描かれているのは、クリスマスツリーなのだろうか。それが水面に反射している。
区別のつきにくい水銀の虚実の光景に接して、心によぎるかすかなざわつきを感じた作者は、ゆらぎの治まった水に映り込む華やかさの奥底に、ひっそりと潜む不確かさを見たのだろう。
そして見失わないように目をこらし、再びゆらぎの隙間に逃げ込んでしまったその正体を掴み取ろうと凝視していたのだろうか。
複雑で、研ぎ澄まされた、絵画の可能性を押し広げた傑作だと思った。

東京都生まれ
2003年 武蔵野美術大学 造形学部卒業
2019年 京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）大学院 芸術研究科 修士課程修了
第3回国際芸術コンペティション・アートオリンピア2019 優秀賞

準大賞（三越伊勢丹賞） 吉岡由美子《地磁気》

【作品評】
一瞬の爆風で吹き飛ぶ椅、鳥、枝。背景は、鉛色の閉鎖空間だ。
原子力の時代、現代人の心に通奏低音のように潜む暗れない閉塞感。
不安感の吐露が美しければ、美しい人生を生きてきたことの証にもなる。
質感、空間ともに迫真性に満ちていて見事というほかない。
作者は、鉛筆で背景を、字を書くように描いている。
一瞬一瞬、24時間を生きていることを刻むように。
完成度は高く、リリカルで、しかも力強い。ここに絵画の一つの到達点がある。



1977年 東京都生まれ
2005年 武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻日本画コース修了

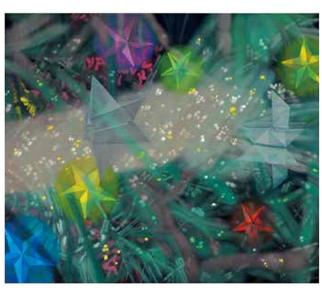
【作品評】
作品はいつも挑戦的で、大胆で、積極的に発信していて、将来が楽しみな逸材だ。
使う黒が、強くていい。独特の世界観を、多くの人が注目している。
ほとばしるエネルギーが見るものを引きつける。
柔らかい表情を部分的に持てば、更に幅広く、対比が曖昧になるかもしれない。
技法や素材に柔軟に対処し、張りのある強さに加え、様々なしなやかさをハイブリッドで取り入れて、堂々と画業を突き進んでほしい。

※【作品評】はいずれも千住博氏による

三越美術部賞 大浦雅臣《Hopes》

第1回 三越伊勢丹・千住博日本画大賞展入選者

青木秀明 Aoki Hideaki 《孔雀図 ―荘厳極まり―》
安藤緋那 Ando Hina 《菊理媛命》
王 青 Oh Sei 《夜の地鉄》
大浦雅臣 Oura Masaomi 《Hopes》
開藤菜々子 Kaito Nanako 《うつろふ》
笠井 通 Kasai Haruka 《はなつ》
川上椰乃子 Kawakami Yashinoko 《嵐が来る日》
甲村有未菜 Koumura Yumina 《Sea of memory》
全 民玉 Choun Minok 《不確かな世界 ―落ちた星―》
津田親重 Tsuda Chikashige 《雪解》
中村貴弥 Nakamura Takaya 《富士額晶山景図 ―櫻の連―》
並木 功 Namiki Isao 《海洋 mandala》
西川礼華 Nishikawa Ayaka 《共通言語》
野村京香 Nomura Kyoka 《道》
廣瀬佐紀子 Hirose Sakiko 《岩陵》
深作秀春 Fukasaku Hideharu 《難破船》
三浦春雨 Miura Harusame 《betweens》
楊 喩淇 You Yuki 《夜の隅》
吉岡由美子 Yoshioka Yumiko 《地磁気》
吉田幸紘 Yoshida Yukihiro 《一月在天》
（50音順）



全 民玉《不確かな世界―天の川―》2020年 45.5×53.0cm

第1回
三越伊勢丹
千住博
HIROSHI SENJU
日本画大賞

会期・会場
2020年 8月26日(水)～31日(月)
午前10時～午後7時 ※最終日は午後5時閉場
日本橋三越本店 本館6階 美術特選画廊

切り口の独創性で時代を先導する
新しい日本画をご覧ください。

【協力】株式会社 新生堂

MITSUKOSHI
日本橋本店
〒103-8001 東京都中央区日本橋室町1-4-1
電話(03-3241-3311(大代表)) www.mitsukoshi.co.jp

The Shin Bijutsu Shinbun — Since 1971
新美術新聞
9/1 500円(税込) SEPTEMBER 2020
(株)美術年鑑社
発行所：〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-3 電話：03-3295-1635
発行人・油井一人 編集人：油井一人
E-mail: shinbun@art-news.co.jp

本号の主な記事

1面 第1回三越伊勢丹 千住博 日本画大賞決定
2面 新美術時評 馬渕明子
美・友・人 押元一敏
From NEW YORK 宮井玲子
《秋の公募展》改組新第7回日展審査員発表
3面 青春プレイバック 万代進 空庵
フェイス21世紀 吉澤光子
画材考㊻ 山口睦子
街角アート 星野清一
4面 大樋焼 父子三代展 無窮の会 Trilogy vol.2
5面 特集 作品保管・管理アンケート